

## 「荻窪の記憶」

こぼればなし

## 京橋大根河岸と荻窪

いまでは川も橋もない中央区の京橋。銀座通りから少し入ったかつての橋詰に「京橋大根河岸青物市場跡」の碑がひっそりと立っています。江戸時代から昭和10年まで、約280年の間、ここに青物市場があったというのです。ちょっと意外な感じがするかもしれませんが、江戸市民の胃袋を支える魚や野菜の市場は水運の便のよい川や運河の河岸に設けられました。そして、モガやモボが銀座通りを闊歩する昭和初期まで、「積み上げられた大根が白い花のようだった」という京橋大根河岸の青物市場はつづいたのです。

たまたま出会った石碑が語る市場の歴史に筆者が興味をもったのは、以前、録音テープで聞いた荻窪の古老の話を出したからです。かつて、荻窪の農家では、大根やサツマイモなどの作物が一斉に収穫の時期を迎える秋になると、大八車に収穫した野菜を満載し、市内の青物市場へ売りに行きました。その市場の一つが京橋にあったというのです。

「大根を洗ってね。暗いうちに起きて。青梅街道、中野の坂を下って、成子坂上がって、新宿通って、三宅坂、桜田門、日比谷の交差点、通ってね。いまの帝劇の脇通って京橋へ。みんな行ったんですよ。井草の人でも、みんな荷車牽いて、朝三時ごろかな、ゴロゴロ、車牽いて、たいへん。大根でも、サツマイモでも、野菜の市場、そこまで行かないとなかった（都築勝三郎談）」



京橋大根河岸の碑



大根河岸の賑わい

別の農家の回想によると、野菜の運搬は一日おきに、9月から12月まで続いたそうです。一度に百貫目（375キロ）以上の野菜を積み、荻窪を夜の12時半頃に出発。神田の青物市場に着くのは朝の7時ごろだったといえます。

「新宿までは、家の人が一人後押ししてくれる。新宿まで後押しを手伝ってもらうと、後押しの方は、帰りは中央線の汽車に乗って帰った。それからは孤独な一人旅だ」「雨が降ると、とんでもない悪路となり、ぬかるんだ中を重い荷物を引っ張っていかなければならない」「真冬でもいつもシャツ一枚だった。そのシャツも汗でびしょり」（井川俊之助『武蔵野に生きる』）

東京の中心街を行く、武蔵野の野菜を満載した大八車の群れ。秋の風物詩の一つだったのではないのでしょうか。

「荻窪の記憶」プロジェクト 松井和男